彙報

オランダにおける東洋學研究の現狀

昭和三十六年七月十九日、東洋文庫談話會に於て、ライデン大學教授フリッツ・フオス（Frits Vos）氏が「オランダにおける東洋學研究の現狀」と題する講演をされた。その要旨は左の通りである。

オランダにおける「東洋學」と云う言葉は非常にひろい意味を持つています。つまり、エジプトから日本に至る地域の言語や文化の研究をさすだけでなく、場合によつてはアフリカやオランダ領西インド（スリナム及びアンティリーズ諸島）の言語および文化の研究をも含みます。現在、東洋學研究が行われている大學の名をあげれば、ライデン、ユトレヒト、フロニンゲンの國立大學アムステルダムの市立大學および自由大學、ネイメーヘンのローマ・カトリック大學などがありますが、この全部に共通なのはセム系諸語、およびサンスクリットの講義ぐらいのもので、最も古い傳統を有するのはライデン大學です。周知の通り、ライデン大學は八十年戰爭の際のライデン市民の奮鬪をたゝえて、一五七五年に設立されたもので、最初は神學の研究が重きをなしましたが、東洋學の分野は十九世紀に入つて著しい發展を示し、スヌーク・ヒュルフローニェ（Snouck Hurgronje）（イスラム學）、ヘンドリック・ケルン（Hendrik Kern）（インド學とくにサンスクリット）、フオーヘル（G. Ph. Vogel）（インド考古學）、ヨインボール（H. H. Juynboll）（インドネシア諸言語）、クロム（H. N. Krom）（インドネシア考古學および美術史）、ボス（F. D. K. Bosch）（同上）、ファン・フォレンホーフェン（C. van Vollenhoven）（慣習法）、ジョスラン・ド・ヨング（J. P. B. de Josselin de Jong）（文化人類學）、スフレーヘル（Gustave Schlegel）（シナ學）、ダイフェンダーク（J. J. L. Duyvendak）（シナ學）、などの名は、過去から現在に及ぶオランダ東洋學の輝かしい傳統を示して居ます。

しかし第二次世界大戰後、インドネシアが共和國として獨立したことは、オランダの東洋學研究に大きな影響を及ぼしました。もともとオランダ政府は、植民地行政の實際上の必要からインドネシアの言語や考古學調査のための專門家養成につとめ、ライデン及びユトレヒトの兩大學には東インド政廳勤務者のための特別のコースが置かれ、インド學（オランダ語の Indologie には舊オランダ領東インドの研究も含まれます）やそれに關聯する法學（たとえばインドネシア慣習法）文學などの知識を授けていましたが、これらはかなりの變更を餘儀なくされました。また中國、日本の研究者は、かつてバタヴィアの東亞局において勤務することが出來ましたが、その道も現在ではとざされ、東洋學を專攻しようとする學生の數も決して多くはありません。

現在ライデン大學に於て教えられているアジア・アフリカ關係の諸言語は次の通りです。

アフリカ諸語　アッカド語
アラビア語　アラム語
オーストロネジア言語學　バビロニア語
インドネシア語　バントウ諸語
中國語　エジプト語
ヘブライ語　日本語
ジャワ語　朝鮮語
マライ語　パーリ語
近代ペルシャ語　サンスクリット
スリナム諸語　シリア語
タガログ語　チベット語
トルコ語

これらの諸言語とならんで、關聯のある諸講義、たとえば一般言語學、社會學、文化人類學、南アジア考古學、佛教學、イスラム學、非西歐地域の經濟・法律、中國の法制、西歐の東洋進出史、海外領土の歴史、インドネシア現代史などの講義が行われています。なお戰後あらたに設けられた講座としては、一九五六年にチベット語および佛教學の講座が獨立に設けられ、また五八年には從來の日本語學の講座の中に、朝鮮語學も含まれる樣になりました。

オランダの大學に於けるアジア・アフリカ諸言語の講義は、終了までに大體六―七年を要し、その間二度の試驗があつて、これはほゞ歐米および日本のB、A、及びM、A、に當ります。たゞし、一般にドイツやアメリカなどと違つて、博士號の取得には相當の長年月を要するのが普通です。

東洋についての重要なコレクションとしては、ライデンの民族學博物館および古代博物館、アムステルダムの王立熱帶研究所、およびアジア美術博物館、などを擧げることが出來ます。また研究所としては、ライデンにある東洋研究所ケルン・インスティテュート、漢學研究院、近東考古學・言語學研究所、ハーグの王立言語・地理・民族學研究所などがあります。また學術雜誌としては、さきに述べたハーグの王立研究所が發行している季刊「ベイドラーヘン」(Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde)の他「通報」(T'oung Pao)、インド考古學年次書目(Annual Bibliography of Indian Archaeology)、エジプト學年次書目(Annual Egyptological Bibliography)の三つがライデンで出版されています。比較的新しいものとしては、一九五七年以降出版されているインド・イラニアン・ジャーナル(Indo-Iranian Journal)があります。

さて、過去における植民勢力としてのオランダの繁榮が研究の推進に力あつたことを考えると、今後の見通しは必ずしも明るくありませんが、將來オランダの東洋學の傳統を見失わないためには、若い東洋學者の地位がもつと保證されたものにならなければなりません。また同時に學問の立場から云えば、東洋學の個々の

部門と他の研究分野との間に一層のつながりを求めることこそ必要です。私は一九五二年冬、岡山のミシガン大學日本研究所を訪れた際、歴史學、社會學、心理學などを專攻する若いアメリカ學徒が、日本に於ける地域研究からどれ程大きな收穫を得ているかを見て、大いに感銘を受けました。オランダに於ても、これと同樣、歴史學專攻の學生が中國語、日本語の研究を行ない、言語學、文化人類學の學徒が日本研究に興味をもつなどの場合が、最近續々とふえつゝあります。ハーグの社會科學研究所でも、朝鮮、日本、トルコ、エチオピアなどの現代に於けるめざましい發展について研究するためのセミナーが作られました。この樣に地域研究が常に一般の問題とむすびつき、再び地域の問題に立ち返って行くと云う不斷の交流のうちにこそ、オランダのみならず、ひろく世界の東洋學の今後の方向が示されている樣に思われます。

（永　積　昭　記）

訂　正

第四十四卷第一號目次、批評と紹介欄中の增淵龍夫著、中國古代の國家と社會を次の通り訂正致します。

增淵龍夫著　中國古代の社會と國家